

日蓮之を記す

問うて云はく、十八円満の法門しゆつしよい かんの出処如何。答へて云はく、源蓮みなもとの一字より起これるなり。問うて云はく、此の事所しよしゃく釈に之を見るや。答へて云はく、伝教大師しゆぜん じ そうでん修禅寺相伝の日記に之在り。此法門は当世天台宗の奥義なり。秘すべし秘すべし。

問うて云はく、十八円満みょうもくの名目如何。答えて云はく、一に理性円満、二に修行円満、三に化用けゆう円満、四に果海かかい円満、五に相即そうそく円満、六に諸教円満、七に一念円満、八に事理円満、九に功德円満、十に諸位円満、十一に種子円満、十二に権実円満、十三に諸相そくたい円満、十四に俗諦ぞくたい円満、十五に内外円満、十六に観心かんじん円満・十七に寂照じゃくしやう円満、十八に不思議ふ円満上。

問うて云はく、意如何。答へて云はく、此の事伝教大師の釈に云はく「次に蓮の五重じゆうげん玄とは、蓮をば華因けいんじやう かい成果の義に名づく。蓮の名は十八円満の故に蓮と名づく。一に理性円満、謂はく万法い悉ことごとく真如法性の実理に帰す。実性の理に万法円満す、故に理性を指して蓮と為す。二に修行円満、謂はく有相無相の二行を修して万法円満す、故に修行を蓮と為す。三に化用円満、謂はく心性の本理に諸法の因分有り。此の因分に由って化他の用を具す、故に蓮と名づく。四に果海円満とは、諸法の自性を尋ねて悉く本性を捨て無作の三身を成す。法として無作の三身に非ざること無し、故に蓮と名づく。五に相即円満、謂はく煩惱じしやうの自性ぼだい全く菩提にして一体不二の故に蓮と為す。六に諸教円満とは諸仏の内証ないしやうの本蓮ほんれんに諸教を具足して更に欠減なきが故に。七に一念円満、謂はく根塵こんじん相對して一念の心起るに三千世間を具するが故に。八に事理円満とは、一法の当体而ににふに不二にして欠減無く具足するが故に。九に功德円満、謂はく妙法蓮華經に万行の功德を具して三力の勝能しやうのう有るが故に。十に諸位円満とは、但一心を点ずるに六即円満なるが故に。十一に種子円満とは、一切衆生の心性もとに本より成仏の種子を具す。権教は種子円満無きが故に皆成仏道の旨を説かず。故に蓮の義無し。十二に権実円満、謂はく法華実証じっしやうの時は実に即して而も権、権に即して而も実、権実相即して欠減無きが故に、円満の法にして既に三身を具するが故に、諸仏常に法を演説す。十三に諸相円満、謂はく一々の相の中に皆八相を具して一切の諸法常に八相を唱ふ。十四に俗諦円満、謂はく十界・百界乃至三千の本性常住不滅なり、本位を動ぜず当体即理の故に。十五に内外円満、謂

はく非情の外器に内の六情を具す。有情数の中に亦非情を具す。余教は内外円満を説かず、故に草木成仏すること能はず。草木成仏するに非ざるが故に亦蓮と名づけず。十六に観心円満とは、六塵六作常に観心の相にして更に余義に非ざるが故に。十七に寂照円満とは、文に云はく、法性寂然なるを止と名づけ、寂にして而も常に照らすを觀と名づく。十八に不思議円満とは、謂はく細しく諸法の自性を尋めるに、非有非無にして諸の情量を絶し、亦三千三觀並びに寂照等の相無く、大分の深義本来不思議なるが故に名づけて蓮と為すなり。此の十八円満の義を以て委しく經意を案ずるに、今經の勝能並びに觀心の本義良に蓮の義に由る。二乗・悪人・草木等の成仏並びに久遠塵点等は、蓮の徳を離れては余義有ること無し。座主の伝に云はく、玄旨の正決を尋めるに十九円満を以て蓮と名づく。所謂当体円満を加ふ。当体円満とは当体の蓮華なり。謂はく、諸法は自性清淨にして染濁を離るゝを本より蓮と名づく。一經の説に依るに、一切衆生の心の間に八葉の蓮華有り。男子は上に向かひ、女人は下に向かふ。成仏の期に至れば設ひ女人なりと雖も心の間の蓮華速やかに還りて上に向かふ。然るに今の蓮、仏意に在るの時は本性清淨当体の蓮と成る。若し機情に就いては此の蓮華譬喩の蓮と成る。次に蓮の体とは、体に於て多種有り。一には徳体の蓮、謂はく本性の三諦を蓮の体と為す。二には本性の蓮体、三千の諸法本より已来当体不動なるを蓮の体と為す。三には果海真善の体、一切諸法は本是三身に於て寂光土に住す。設ひ一法なりと雖も三身を離れざる故に三身の果を以て蓮の体と為す。四には大分真如の体、謂はく不変・隨縁の二種の真如を並びに証分の真如と名づく。本迹寂照等の相を分かつたず諸法の自性不可思議なるを蓮の体と為す。次に蓮の宗とは果海の上の因果なり。和尚の云はく、六即の次位は妙法蓮華經の五字の中には正しく蓮の字に在り。蓮門の五重玄の中には正しく蓮の字より起こる。所以は何。理即は本性と名づく。本性の真如・果性円満の故に理即を蓮と名づく。果海本性の解行証の位に住するを果海の次位と名づく。智者大師、自解仏乘の内証を以て明らかに經旨を見たまふに蓮の義に於て六即の次位を建立したまへり。故に文に云はく、此の六即の義は一家より起これり。然るに始覺の理に依つて在纏真如を指して理即と為し、妙覺証理を出纏真如と名づく。正しく出纏の為に諸の万行を修するが故に、法性の理の上の因果なるが故に亦蓮の宗と名づく。蓮に六の勝能有り。一には自性清淨にして泥濁に染まらず。二には華台実の三種具足して減すること無し。三には初め種子より成実に至るまで華

台実の三種相續して断ぜず觀行即。念念相續して修し廢するなき故に。 四には華葉の中に在りて未熟みの実、眞の實に似たり相似。五には花開き蓮現分ず節。六には花落ちて蓮成究ず節。此の義を以ての故に六即の深義はみなもと源蓮の字より出でたり。次に蓮の用とは、六即円満の徳に由って常に化用を施すが故に。次に蓮の教とは、本有ほんぬの三身果海じんかかいの蓮性れんしょうに住して常に浄法を説きはっそうじょうどう八相成道し四句成利す。和尚云はく証道の八相は無作三身の故に、四句の成道は蓮教の処に在り。只無作三身を指して本覺の蓮と為す。此の本蓮に住して常に八相を唱へ、常に四句の成道なを作す故なり」呈。修禅寺相伝日記之を見るに、妙法蓮華經の五字に於て各々五重玄なり蓮の字の五重玄義此くの如し余は之を略す。

日蓮案じて云はく、此の相伝の義の如くんば万法の根源一心三觀・一念三千・三諦・六即・境智きょうち えんちゅう ほんじゃく しょせん みなもとの円融・本迹い かんの所詮、源蓮の一字より起こる者なり云云。問うて云はく、総説の五重玄とは如何。答へて云はく「総説の五重玄とは妙法蓮華經の五字即ち五重玄なり。妙はみょう名、法はたい体、蓮はしゅう宗、華はゆう用、經はきょう教なり」と。又「総説の五重玄に二種有り。一にはぶつち仏意の五重玄、二にはきじょう機情の五重玄なり。仏意の五重玄とは、諸仏の内証に五眼の体を具する即ち妙法蓮華經の五字なり。仏眼ぶつげん妙、法眼ぼうげん法、慧眼えげん蓮、天眼てんげん華、肉眼にくげん經。妙は不思議に名づくるが故に真空冥寂しんくうみょうじゃくは仏眼なり。法は分別に名づく、法眼は仮なり、分別の形なり。慧眼は空なり、果体は蓮なり。華は用なる故に天眼と名づく、神通は化用なり。經は破迷はめいの義に在り、迷を以て所対と為す、故に肉眼と名づく。仏智の内証に五眼を具する即ち五字なり。五字又五重玄なり。故に仏意の五重玄と名づく。亦五眼即五智なり。法界体性智たいしやうち、大円鏡智だいえんきやうち、平等性智びやうどうしやうち、慧眼みょうかんさつち、妙觀察智じやうしよさち、成所作智じやうしよさちなり。問ふ、一家には五智を立つるや。答ふ、既にすで九識しきを立つ故に五智を立つべし。前の五識は成所作智、第六識は妙觀察智、第七識は平等性智、第八識は大円鏡智、第九識は法界体性智なり。

次にきじょう機情の五重玄とは、機これの為に説く所の妙法蓮華經は即ち是機情の五重玄なり。首題の五字に付いて五重の一心三觀有り。伝に云はく、

妙 不思議の一心三觀 天真独朗てんしんどくろうの故に不思議なり
 法 円融の一心三觀 理性の円融なり総じて九箇を成ず
 蓮 得意の一心三觀 果位なり
 華 複疎ふくその一心三觀 本覺の修行なり
 經 易解いげの一心三觀 教談なり

玄文の第二に此の五重を挙ぐ。文に随って解すべし。不思議の一心三觀とは、智者

己証こしょうの法体、理非造作りひぞうさの本有ほんぬの分なり、三諦の名相無き中に於て強ひて名相を以て説くを不思議と名づく。円融とは、理性法界の処もとに本より已来このかた三諦の理有り、互ひに円融して九箇と成る。得意とは、不思議と円融との三観ぼんしんは凡心の及ぶ所に非ず、但聖智じじゆうの自受用の徳を以て量知すべし、故に得意と名づく。複疎ふくそとは、無作の三諦は一切法に遍して本性ほんしやう常住なり、理性の円融に同じからず、故に複疎と名づく。易解とは、三諦円融等の義知り難き故に、且しばらく次第に附して其の義を分別す、故に易解と名づく。此を附文の五重と名づく。次に本意に依つて亦五重の三観有り。一に三観一心入寂門の機、二に一心三観入照門の機、三に住果還の一心三観なり。上の機有つて知識の説を聞いて、一切の法は皆是仏法なりと、即ち聞いて真理を開す。入真已後、観きわを極めんが為に一心三観を修す。四に為果行因の一心三観、謂はく、果位究竟の妙果を聞いて此の果を得んが為に種々の三観を修す。五に付法の一心三観、五時八教等の種々の教門を聞いて此の教義を以て心に入れて観を修す、故に付法と名づく」と。山家の云はくさんげはく塔中の言なり「亦立行相を授く。三千三観の妙行を修し、解行せいびの精微に由つて深く自証じしやうもん門に入る。我汝が証相を領するに、法性寂然なるを止しと名づけ、寂にして常に照すを観と名づく」と。

「問うて云はく、天真独朗の止観の時、一念三千・一心三観の義を立つるや。答へて云はく、両師の伝不同なり。座主の云はく、天真独朗とは一念三千の観これ是なり。山家師の云はく、一念三千而も指南と為す。一念三千とは、一心より三千を生ずるにも非ず、一心に三千を具するにも非ず、並立にも非ず、次第にも非ず。故に理非造作と名づく。和尚の云はく、天真独朗に於ても亦多種有り。乃至迹中に明かす所の不変真如も亦天真なり。但し大師本意の天真独朗とは、三千三観の相を亡じ、一心一念の義を絶す。此の時は解無く行無し。教行証の三箇の次第を経るの時、行門に於て一念三千の観を建立す。故に十章第七の処に於て始めて観法かんぼうを明かすは是因果階級の意なり。大師内証の伝の中に、第三の止観は伝転の義無しと云云。故に知んぬ、証分の止観は別法を伝へざるなり。今止観の始終に録する所の諸事は皆是教行の所撰にして実証の分かいげん ぶしゆうに非ず。開元符州の玄旨の相伝に云はく、言を以て之を伝ふる時は行証共に教と成る。心を以て之を観ずる時は教証は行の体と成る。証を以て之を伝ふる時は教行亦不可思議なり。後学此の語に意を留めて更に忘失すること勿れ。宛なかも此の宗の本意、立教の元旨なり。和尚の貞元の本義、源此より出でたるなり」と。

問うて云はく、天真独朗の法、滅後に於て何れの時か流布せしむべきや。答へて云はく、像法に於て弘通すべきなり。問うて云はく、末法に於ける流布の法の名目如何。答へて云はく、日蓮の己心に相承せる秘法を此の答へに顯はすべきなり。所謂南無妙法蓮華經これ是なり。問うて云はく、証文如何。答へて云はく、神力品に云はく「爾その時仏上行等の菩薩に告げたまはく、要を以て之を言はゞ乃至宣示顯説す」云云。天台大師云はく「爾時仏告上行より下は第三結要けつちよう ぶ ぞく付嘱なり」と。又云はく「經中の要説・要は四事に在り」と。「総じて一經を結するに唯四ならくのみ。其の枢柄すうへいを撮とつて之を授与す」と。問うて云はく、今の文は上行菩薩等に授与するの文なり。汝何が故ぞ己心相承の秘法と云ふや。答へて云はく、上行菩薩の弘通し給ふべき秘法を日蓮先立ちて之を弘む。身に当たるの意に非ずや。上行菩薩の代官の一分なり。所詮末法に入って天真独朗の法門無益なり。助行には用ゆべきなり。正行には唯南無妙法蓮華經なり。伝教大師云はく「天台大師は釈迦に信順して法華宗を助けて震旦しんだんに敷揚ふ しようし、叡山の一家は天台に相承して法華宗を助けて日本に弘通す」と。今日蓮は塔中相承の南無妙法蓮華經の七字を末法の時、日本国に弘通す。是豈時国相應の仏法に非ずや。末法に入って天真独朗の法を弘めて正行と為さん者は、必ず無間大城に墜ちんこと疑ひ無し。貴辺年来の権宗を捨て、日蓮が弟子と成り給ふ。眞実、時国相應の智人なり。総じて予が弟子等は我が如く正理を修行し給へ。智者・学匠の身と為りても地獄に墜ちて何の詮か有るべき。所詮時々念々に南無妙法蓮華經と唱ふべし。上に挙ぐる所の法門は御存知たりと雖も書き進らせ候なり。十八円満等の法門能々案じ給ふべし。並びに当体蓮華の相承等、日蓮が己証の法門等、前々に書き進らせしが如し。委しくは修禅寺相伝日記の如し。天台宗の奥義之に過ぐべからざるか。一心三觀・一念三千の極理ごくりは妙法蓮華經の一言を出あでず。敢へて忘失すること勿れ、敢て忘失すること勿れ。伝教大師云はく「和尚慈悲有って一心三觀を一言に伝ふ」と。玄旨伝に云はく「一言の妙旨なり一教の玄義なり」云云。寿量品に云はく「毎つねに自ら是の念を作さく、何を以てか衆生をして無上道に入り、速やかに仏身じようじゆを成就することを得せしめんと」云云。每自作是念の念とは、一念三千しやうぶつ生仏本有の一念なり。秘すべし秘すべし。恐々謹言。

弘安三年十一月三日

日 蓮 花 押

最 蓮 房 に 之 を 送 る